

Title	スペイン語人称目的格と代名詞化
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 26 p.1-p.18
Issue Date	1972-01-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80422
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スペイン語人称目的格と代名詞化

El caso objetivo personal y su pronominalización en español

出 口 厚 実

Atsumi DEGUCHI

El acusativo personal de español, que se caracteriza por la presencia de la preposición “a”, es idéntico en su forma y muy parecido sintácticamente al caso dativo hasta confundirse en algunas estructuras. También se observa en el pronombre personal el parentesco entre el acusativo y el dativo. Así en este artículo voy a presentar una hipótesis sobre la interpretación unitaria de los dos casos españoles, y formular fragmentos de una gramática con arreglo a ésta. El autor propone la substitución de la distinción acusativo-dativo por un solo caso objetivo distinguido por el rasgo sintáctico “humano-no humano” y trata de aclarar las relaciones entre este caso y la pronominalización.

いわゆる「人称 a」の統語的解明は西語の文法研究に課せられた（未解決の？）難問の一つとして注目され種々の立場から扱われてきた。前置詞がどのような対格に対して使用され、あるいは使用されていないか、又どんな場合にその使用が任意的であるかという用法の詳細な調査や検討はこれまでにかなりの成果をあげている。またこのような現象の背後に潜む言語事実を説明する包括的な規則を定式化しようとする試みも見られる。¹ これらに筆者が付け加えるべきような新しい発見はほとんどない。しかし従来の研究では a + 対格だけか、これと共に起る syntagmatic な関係にある他の文構成要素が同時に検討されるにとどまり、顧みられなかったか少なくとも中心的に取り上げられなかった問題がある。² 即ち、動詞の性質や場合によっては主語の人称数、有生性などが「a」の生起に影響を及ぼすことが明らかにされてはいるが、「a + 対格名詞」又は「対格名詞」に関して paradigmatic な要素との関係は見失われがちであった。ここでは、従って、孤立的にとらえられた「対格 a」そのものの統語的特性ではなく、「a + 人称目的」が特に人称代名詞、与格の a などと無関係なのかあるいはどのように関連づけるべきかという角度から見て行きたい。

ところで本稿が西語の資料として用いるのは一定範囲の文学作品又は発話の Corpusではなく、むしろスペイン本国の母国語使用者が以下のような質問に対して行なう判断である：(1) 一定の

文で目的格名詞の前に前置詞 a を伴う文は適格(well-formed)か否か。(2) 前置詞 a が欠ける点だけで S と異なる S' は適格か否か。(3) 対格代名詞 Pa, Pa' をそれぞれ含む Sa, Sa' は適格か否か。(4) 与格代名詞 Pd を含む文 Sd は適格か否か。(5) Sa, Sa', Sd の間に直観的に認められる何らかの差・共通点が存在するか否か。

1) 前置詞 a が存在するか否かの違いによってのみ区別される以下の対で * を付した文は正常でないとみなされる。

- (1) a. Juan ve al chico. b. *Juan ve el chico.
- (2) a. Juan ve a un chico. b. Juan ve un chico.
- (3) a. *Juan ve al libro. b. Juan ve el libro.
- (4) a. *Juan ve a un libro. b. Juan ve un libro.

前置詞 a は (1 a), (2 a b) のように対格名詞の前にだけ見られるのではなく与格を指示する機能をも持つ。

- (5) a. Pedro muestra un libro a Juan.
- b. *Pedro muestra un libro Juan.
- c. *Pedro muestra un libro a la mesa.
- d. *Pedro muestra a un libro Juan.

(1)~(5) で * が付けられなかった文の中で a が生じているのは chico, Juan の前のみである。chico と Juan は明らかに特定種類の名詞に属す。今、それらの名詞は統語素性 [+human] で特徴づけられると仮定する。2重目的語文(5)では [-human] である名詞は与格に立たない。言い換えれば与格の資格は基本的に [+human] である。³ だから *a は与格・対格に係わりなく [+human] をもつ目的格名詞の前の方に起りうると言うことができる。⁴

2) 上記(1 a), (3 b), (5 a) の各文の目的格名詞を代名詞に置き換えた文として適格なのは (1' a), (1' a'), (3' b), (5' a a'') である。

- (1') a. Juan lo ve.
- a' Juan le ve.
- (3') b. Juan lo ve.
- b' *Juan le ve
- (5') a. Pedro le muestra un libro.
- a' *Pedro lo muestra un libro.
- a'' Pedro lo muestra a Juan.
- a'''*Pedro le muestra a Juan.

ここでも対格の一部と与格との類似に気づく。代名詞 le は前出の [+human] で特徴づけられる与格・対格名詞に照応して用いられている。

さらに《deixis》とも呼ばれる次のタイプの構文を比較してみよう。

- (6) a. Lo veo a Juan.
- b. Le veo a Juan.
- c. *Lo veo al libro.
- d. Le muestro el libro a Juan.
- e. *Lo muestro el libro a Juan.
- f. *Lo muestro al libro a Juan.

上から明らかなように deictic 代名詞 le (lo) と a + 目的語が共起する文が文法的と認められるには与格にせよ対格にせよ目的語は必ず [+human] でなければならない。一般に《deixis》構文が成立する要件として、対格の場合さらに [+proper] が必要である。⁵

対格または与格が動詞に先行し且つ anaphoric 代名詞が共存する(7)のような文は西語にごく普通に見られる。この文型は表面的には(6)の《deixis》と語順だけが異なるように見えるが、別種のものであり、単なる文体的異形ではない。

- (7) a. Al chico lo vi en la habitación.
- b. Al chico le vi en la habitación.
- c. *Al libro lo vi en la habitación.
- d. Al chico le mostré el libro.

非人間性の名詞に対しては(6), (7)の構文は全く成立しない。また(1)~(5)に平行した2重代名詞文(《pleonasm》構文)及びその倒置形のうち(3'' b), (5'' a'), (3''' b), (5''' a') は西語として一層非文法的な文とみなされるだろう。

- (1'') a. Juan lo ve a él.
- a'. Juan le ve a él.
- (3'') b. *Juan lo ve a él.
- (5'') a. Pedro le muestra a él un libro.
- a'. *Pedro lo muestra a él a Juan.
- (1''') a. A él lo ve Juan.
- a'. A él le ve Juan.
- (3''') b. *A él lo ve Juan.
- (5''') a. A él le muestra Pedro el libro.
- a'. *A él lo muestra Pedro a Juan.

以上に見られる通り3人称目的格代名詞は与格と対格で形態が異なり得るが、1・2人称では必ず同一形態(me, te, nos, os)をとる事実はどう説明すべきだろうか。一般に1, 2, 3人称の順にそれぞれの代名詞と[+human]との結合度が緩くなる。[-human]である1人称はまず考えられない。2人称は稀に[-human]を含みうるが少なくとも[+higher animal]を伴

わねばならない。しかし3人称与格の場合、基本的に〔+human〕だが2人称よりも幾らか緩くなり〔-human〕であっても間接的に人間の活動が内包される若干の名詞に対応して用いられることがある。3人称対格は〔+human〕〔-human〕のいずれでもありうる。常に〔+human〕であることが前提になる1・2人称では与格／対格の対立が必ず中和（neutralize）されるが、〔±human〕の3人称ではこの neutralization は義務的ではない。このように目的格代名詞の特性を考える上で統語素性〔+human〕は重要な意味をもつ。

以上を考慮して目的格人称代名詞は〔+human〕つまり文字通りの‘人称性’との関係に基づき2つのグループに分類できる。一つは必ず〔+human〕で特徴づけられる一連の代名詞 P+h = me, te, le, nos, os, les であり、他は〔-human〕を基本的な特徴としながらも〔+human〕も受け入れるグループ P-h = lo, la, los, las である。素性〔human〕と人称代名詞との関係を図示すれば次のようになる。

人 称		〔human〕	《pleonasm》 構 文	代名詞形
I		+	○	P+h
II		+	○	P+h
III	与格	+	○	P+h
	対格	+	○	P+h/P-h
		-	×	P-h

3) 〔+human〕名詞が動詞の目的語かどうかは形式的に前置詞 a の存在で判断できる。しかしそれが対格なのか与格なのかを見分けるのは必ずしも容易でない。例えば (8) における María は (a) (b) とともに動詞に対し同じような意味関係にある。⁶

(8) a. El profesor enseña latín a María.

b. El profesor enseña a María.

これらは与格なのか対格なのか。従来、P-h の代名詞に置換が可能かどうか（つまり lo, la, los, las を含む文が成立すれば対格とみなす）あるいは ser 受動文の主語となりうるかどうかによって両者は区別できるとされてきた。(a) の María は代名詞置換テストによれば一応与格と考えられる。

(8') a. *El profesor la enseña latín.⁷

a'. *El profesor la lo enseña.

受動転換テストの妥当性にはかなり疑問がある。今日では ser 受動形の使用範囲は限定されており、それ自身大なり小なり normal な構文でない要素を持つために適格か不適格かを判定する厳正な規準に役立つとは思えない。実際両方のテストで矛盾する結果が得られることもある。

(9) a. A ella le llamamos traidora.

b. *A ella la llamamos traidora.

(9 a) の le は la に交換できないから与格とされるが Ella es llamada traidora は認められる。⁸
しかし (8'' a) は (8'' a') に比べれば明らかに逸脱している。

(8'') a. *María es enseñada latín por el profesor.

a'. El latín es enseñado a María por el profesor.

だから (8 a) の María は与格と判定されることになる。ところが同じ María は (8 b) では対格とみなされる。

(10) El profesor la enseña.

(11) María es enseñada por el profesor.

(8 b) に類似した以下のいわゆる two-place verb の構文では、特に動詞が——〔+human〕の選択制限をもつ時、対格か与格か曖昧である。⁹

(12) a. El profesor pregunta a María.

b. Te lisonjeaban.

c. A mí me interesa la lingüística.

d. No me agrada su voz.

e. La noticia nos alegró mucho.

f. El resultado no satisface a los padres.

伝統的には代名詞テストにより (b) (d) は与格、(a) (c) (e) (f) は対格とされている。従って自動詞・他動詞(的用法)の区別もこのような意味での対格を支配するか否かが決め手となり、lisonjear, agradar は一般に自動詞として分類される。

4) 1)~3) でみた諸事実は西語の動詞と目的語との基本的関係において対格と与格との区別が形式的に有意義なのは表面的な代名詞形のごく一部だけに限られること示している。¹⁰むしろ、前置詞 a との共起に典型的に見られるように目的語が〔+human〕か〔-human〕であるかが統語的に関与する肝要な特性であると考えることができる。(1)~(4)の適格文、(8 b), (12)の文はすべて一つの動詞目的語を含むという事実が基本的に重要であり、両者の統語的差異は素性〔human〕を用いることによって説明されるべきである。もしそうしなければ広範囲に認められる一般性を見失うことになる。a つき対格, leísmo を与格化現象と見る考え方も成り立つ。しかし、仮に与格化されるとすればその結果はすべての目的語が与格(人間)／対格(非人間)に分類されることになり、もはやここでの「格」は機能上対立するのではなく人間／非人間の対立を名目的に表わすに過ぎない。それ故ここでは共に目的格と呼び、〔+human〕で特徴づけられる目的格を人称目的格(上の与格、つまり一般の用語での与格と与格化された対格)、〔-human〕で特徴づけられる目的格を非人称目的格(上の対格、つまり非人称対格)と区別することにする。

2 重目的語をとる three-place verb を含む構文は、通常、人称目的格 Ob+h, 非人称目的格 Ob-h 各 1 個を持ち、(5), (7 d), (8 a) などでの *a の生起は (1), (2), (6 a b), (7 a b), (12) の two-place verb と同様に説明できる。

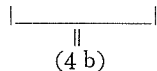
ところで(8 a)と(8 b)で同一関係にある Ob+hとは異なり(1 a)(5 a)の間には Ob+h の動詞に対する関係にある種の差(従来の用語で対格・与格の違い)が存在することは確かである。にもかかわらず共に前置詞 a に先行される理由は単に〔+human〕を共通に持つという事実だけでなく、両者は根底で統語的にもっと密接に関連づけられるからではないのだろうか。

(4 b) Juan ve un libro.

(5 a) Pedro muestra un libro a Juan.

文を意味の集合と考えれば 4 b ⊂ 5 a で、(5 a)の文には(4 b)の意味内容が含まれていると思われる。(4 b)で主語の Juan が(5 a)では Ob+h として現われている。mostrar と ver は語彙形態が全く異なるけれども前者の Ob+h に対する選択制限は後者の主語に対する選択制限と一致しており、又 Ob-h に関して両者とも同じ制限を有す。そこで mostrar を ver+使役を表わす動詞的機能(記号 CAUS で記す)とに分析でき、(5 a)は次のように書き換えられる。

(13) Pedro CAUS Juan ve un libro.



これは(14)と(5 a)が同義であることから確認できる。

(14) Pedro hace que Juan vea un libro.

(13)で Juan が CAUS に対して立つ関係は(1 a) Juan ve al chico の chico と全く同じ Ob+h であり、(5 a)での a の存在は al chico の a と同じ理由で要求される人称目的格の標識であることがわかる。CAUS は単独で dejar, hacer などの具体的動詞形として現われ得るし、又 CAUS +動詞 A に相当する別の動詞 B が存在すれば、B に lexicalize されることが多いと解釈できる。このような見方をすれば(5 a)の Ob+h と(1 a)(12)などに含まれる Ob+h, 又は他の Ob-h との間には本質的な差異はない。先に設けた‘一つの目的格’の仮定は ad hoc でなく three-place 構文にもあてはまる一般的事実であることが明らかになった。

5) P+h は Ob+h のみに照応することができ P-h は主に Ob-h に交代して出現するが Ob+h にも代り得る。2)で示した目的格代名詞の新しい分類法は形態上での代名詞の特殊性を表わすのではなく、西語における目的格の統語的特徴を反映した結果だと結論できる。これまで見て来たように動詞目的語(代名詞・名詞)に対する対格・与格区分に代えて Ob+h/Ob-h の対立を基本的なものとしながら人称目的格とその代名詞化との関係を把握しようとする、西語文法は少なくとも次の点を満足させなければならない。

(15) i) 与格と人称対格の前に置かれる前置詞 a は同じように規定される。

ii) 上記与格・対格に対応する代名詞もまた a の生起に関連して説明される。

iii) three-place 構文での与格は一つの two-place 文の主語であり同時に他の two-place

文の対格である関係が明らかにされる。

そこで、本論に直接関連しない部分は省略して、西語文法の基底部が生成する構造の中には少なくとも以下の句構造規則及び下位範疇化規則により生み出される構文が含まれるものとする。¹¹

- (16) i) $S \rightarrow NP \text{ Pred}$
 ii) $Pred \rightarrow NP \text{ VP}$
 iii) $VP \rightarrow V (NP)$
 iv) $NP \rightarrow N$

Vは動詞・形容詞の両方を包含するカテゴリーで深層構造では〔+adj〕, 〔-adj〕のいずれかに subcategorize されるとする。前置詞 a を後に従えるか否かに関する素性〔PREP〕を含み, recurrir, acceder, faltar, próximo, sujeto, inferior などのVが挿入される時を除き通常は〔-PREP〕で特徴づけられる。

$$v) V \rightarrow \begin{pmatrix} \pm adj \\ \pm PREP \\ \vdots \end{pmatrix}$$

またNは〔±PRO〕, 〔±human〕の素性を含まずである。Text での S, S'…間の referenceに源をもつ〔+PRO〕も存在するが大部分のNは当初は〔-PRO〕である。

$$vi) N \rightarrow \begin{pmatrix} \pm PRO \\ \pm human \\ \vdots \end{pmatrix}$$

6) (1b) は文法的ではないが一般に (1a) と同じ意味解釈を与えるのに支障はないから両者は深層で同一構造を持つ。前置詞 a は深層構造には存在せず変形部門のしかるべき段階で Ob+h の前に導入されると考えることができる。Ob+h の a は (17)~(20) の文に見られるような動詞・形容詞とその Ob-h と介在する前置詞 a と同一変形規則によって一般的に付与する方が文法は簡潔になる。

(17) Pedro accedió a la petición.

(18) María ha faltado a la cita.

(19) Cinco duros equivalen a 25 pesetas.

(20) Esta tela es superior a esta otra.

acceder, faltar……etc. は辞書項目で〔+PREP〕を固有の統語素性として与えられているから、上記のVは深層構造で〔+PREP〕である。他のVはすべて〔-PREP〕の状態にある。そこでまず、Ob+h と同じ VP に直接支配されるVの〔-PREP〕を〔+PREP〕に指定変更する規則を設ける。次にこの規則により変形されて生じた〔+PREP〕, 及び元来の〔+PREP〕を持つVの後に a を導入する規則 T_{pa} を組み込むことによって前述の簡潔化は達せられる。

$$(21) T_{pa} \quad \begin{matrix} X & NP & \begin{pmatrix} +V \\ +PREP \end{pmatrix} & N & Y \end{matrix} \rightarrow 1, 2, 3, a+4, 5$$

1 2 3 4 5

さてどんな場合に [-PREP] が [+PREP] に変わるのか。これは従来からなされて来た‘対格 a’，‘人称前置詞’研究の中心テーマであり，完全に検討し尽されたかどうかは別として，変形生成文法理論に基く H. Isenberg (1968) によってこの分野の大部分が解明されている。‘対格’名詞の前での [-PREP] → [+PREP] を規定する精密な規則がもし作られるとすると(22)のような形をとると考えられる。

(22)

$$[-\text{PREP}] \rightarrow [+ \text{PREP}] / \left(\begin{array}{c} \overline{} \\ +V \\ -\text{adj} \\ +\text{TRANS} \end{array} \right) \left(\begin{array}{c} +N \\ +\text{human} \\ +\text{specified} \\ \left\{ \begin{array}{c} -\text{specified} \\ \vdots \end{array} \right\} \\ \vdots \left[-\text{human} \right] \vdots \\ \left[\right] \\ \vdots \\ \left[\right] \end{array} \right)$$

本論ではその最も本質的な部分 (23) を当面の問題に関連するものと見る。

(23)

$$[-\text{PREP}] \rightarrow [+ \text{PREP}] / \left(\begin{array}{c} \overline{} \\ +V \\ -\text{adj} \\ +\text{TRANS} \end{array} \right) \left(\begin{array}{c} +N \\ +\text{human} \end{array} \right)$$

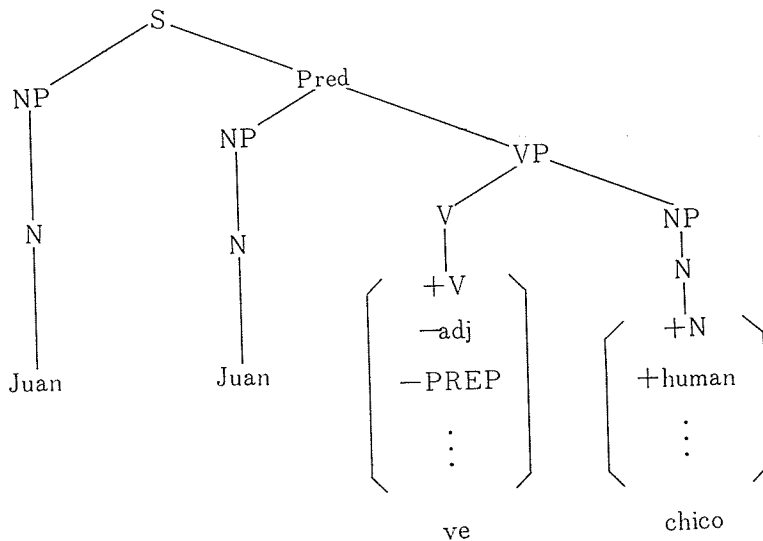
対格だけでなくすべての Ob+h に同時に ‘a’ を付加するために [-PREP] を指定変更する規則は(23)の SD から [+TRANS] を取り除くだけでよい。¹²

(24) Ta

$$[-\text{PREP}] \rightarrow [+ \text{PREP}] / \left(\begin{array}{c} \overline{} \\ +V \\ -\text{adj} \end{array} \right) \left(\begin{array}{c} +N \\ +\text{human} \end{array} \right)$$

7) 文(1a)は基底部で次の構造をもつ。

(25)



(25) は Ta の構造記述に合致するから [+PREP] に変えられた後, Tpa の適用を受けて ve と chico の間に前置詞 a が挿入される。なお Pred の node に直接支配される NP が S に直接支配される NP と同一の時に前者を削除する別の規則 Tnp-d により次のように変形されている。

(26) Tnp-d

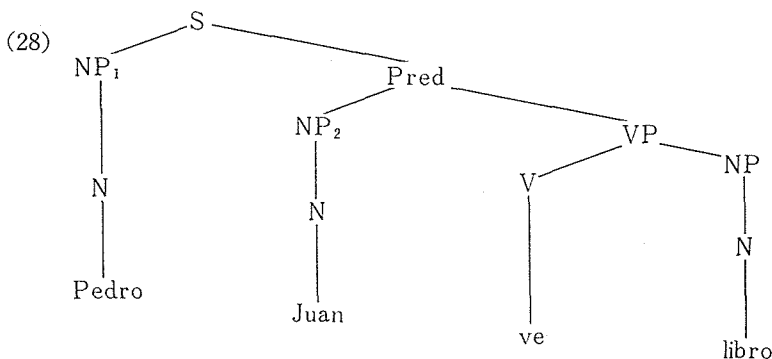
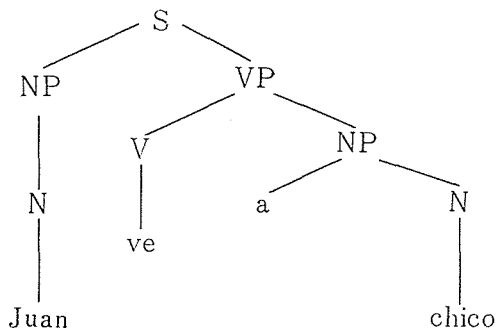
$X_s[NP_1 \overset{\text{pred}}{[NP_2 Y]} Z]$
 1 2 3 4 5

→ 1, 2, ∅, 4, 5

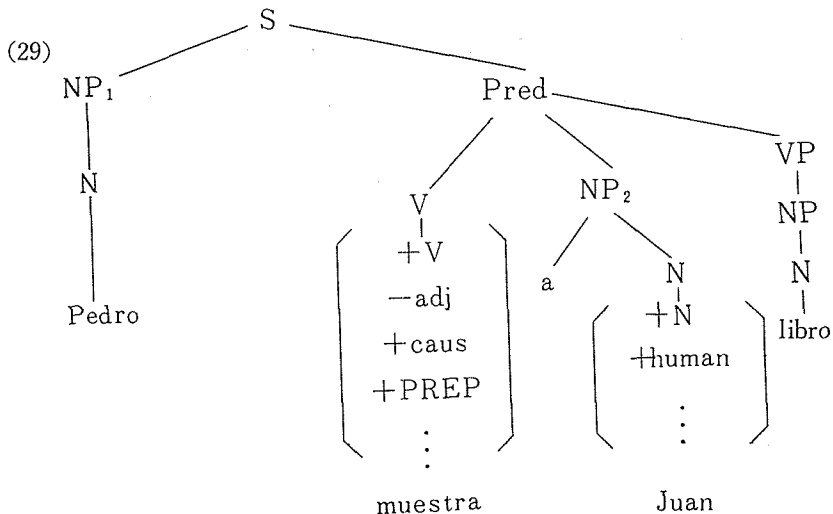
条件: $NP_1 = NP_2$

(5a), (8a) etc. の three-place 構文は深層で次の構造を示す。

(27)



NP_1 と NP_2 が同一でない時, V に [+caus] が付与されると仮定する。そして V の全素性が NP_2 の前に copy される。もしこの素性複合に相当する語彙項目があれば, 例えば CAUS+ver→mostrar のように, 通常, 語彙化されることにより元の V は消去される。そうでなければ [+V, -adj, +caus, ...] は hacer, dejar として実現される。いずれにせよ NP_2 Juan は新たな [+V, -adj] の Ob+h となり, 既出の規則でもって正しく 'a' を導出することができる。



8) 次に a+NP に係わる代名詞化の要点を考えて見たい。ここでは 3 人称代名詞のみを検討するが 1・2 人称の代名詞も本質的に同じ枠組みを用いて説明し得ると考えられる。また anaphoric な代名詞は深層構造から変形によって導かれるという基本的な立場に立つ。

(30) a. Juan llama al chico y lo(le) pregunta.

b. Juan llama al chico y a su madre y lo(le) pregunta a él.

(30 a b)の後半は共に(30 c)の深層構造に遡る。

(30) c. … Juan pregunta chico.

そこでは Juan と chico は適当な方法により前半部の Juan と chico との同一性が認定されているものとする。西語では一般に同一文内に同じ NP が 2 個以上存在する場合、2 番目以降の NP はそれがもし主語であれば削除され、主語以外のときは代名詞化される。(30)で chico はすべて元々 [-PRO] であったが後の chico は [+PRO] に変えられ、また referent を同一単文中に持たないから [-reflexive] の指定を受ける。

目的格代名詞化の第 1 段階は [+PRO] の N に前置された a の前に N から必要な素性を copy することである。

(31) T_{PRO}

$$XY \left(\begin{array}{c} +N \\ +PRO \\ \alpha \end{array} \right) Z \rightarrow 1, \left[\begin{array}{c} +PRO \\ \alpha \end{array} \right] +2, 3, 4$$

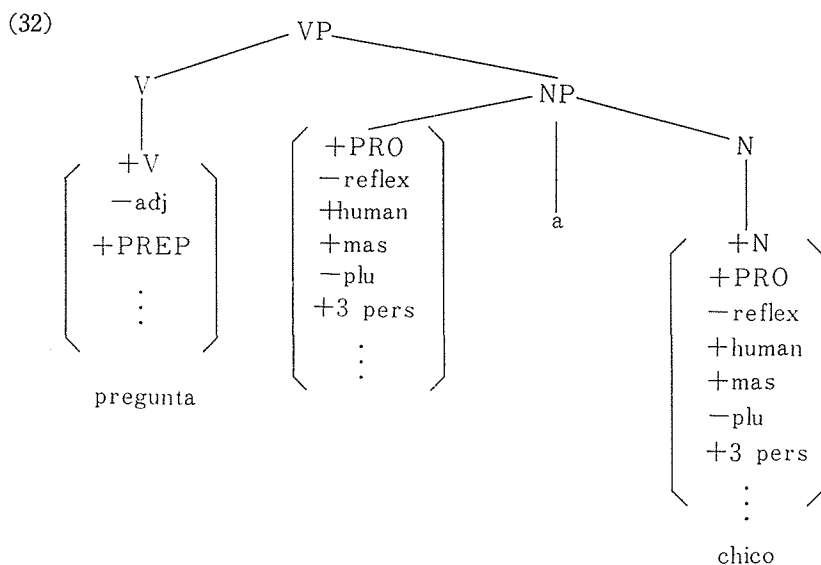
1 2 3 4

ここに $X \triangleright a$, $Y = \emptyset$ 又は a

$\alpha = [\pm human], [\pm masculine], [\pm plural], [\pm reflexive], [\pm 3 person] \dots$

この T_{PRO} は上で見た anaphoric 代名詞化に対しては勿論のこと(1')(3')(5')などの深層起源の代名詞、(6)の deictic 代名詞又は(7)に代表されるような、別の変形に伴って必要になる特殊な代名詞を導くためにも適用される一般的な規則である。《deixis》構文の(6 a)は深層で[Yo (Yo [veo [Juan]_{NP}]]_{VP}]_{Pred} S]であるがNP Juan は [+PRO, +deictic] の素性を備えている。

(7 a) の場合は Yo vi al chico en la habitación に目的格前進変形が copying と削除の 2 段階に分けて行なわれる際、後半部が適用されず Yo al chico vi al chico en la habitación が中間段階に生じた結果、後の chico が [-PRO] から [+PRO] に変わったためである。(30 c)に含まれる VP は(31)の適用後、次のようになる。



(31)によって付加された代名詞 segment は代名詞リストから選出された形式素に交替する。
 Lexicon で3人称目的格代名詞は〔u [+V] —〕の選択制限及び〔m 3 pers〕の他、次の統語素性に unmarked か marked を印されている。

(33)	〔plu〕	〔human〕	〔mas〕
le	u	m	u
lo	u	u	u
la	u	u	m
les	m	m	u
los	m	u	u
las	m	u	m

これらは(34)の解釈規則でそれぞれの指定値に変えられる。

- (34) i) 〔u [+V] —〕 → 〔+ [+V] —〕
 ii) 〔u 3 pers〕 → 〔-3 pers〕
 iii) 〔u plu〕 → 〔-plu〕
 iv) 〔u human〕 → $\left\{ \begin{array}{l} \text{—human} \\ \text{±human} \end{array} \right\} / \left[\begin{array}{c} \text{—} \\ \text{+PRO} \end{array} \right]$
 v) 〔u mas〕 → $\left\{ \begin{array}{l} \text{+mas} \\ \text{±mas} \end{array} \right\} / \left[\begin{array}{c} \text{—} \\ \text{+PRO} \\ \text{m human} \end{array} \right]$

2)で見た西語代名詞の特徴である P+h, P-h の分類が〔human〕に関して marked であるか unmarked であるかに上表で反映されている。代名詞について言えば〔m human〕は人間にだけ

適用されその性別は問わない。一方〔u human〕は人間にも無生物にも照応できるが必ず〔+mas〕か〔-mas〕の違いに従って別の形態をとる。

これにより(32)に合致する代名詞形は *le* または *lo* であり、このうちのどちらかが代入された文は文法的である。

《deixis》の場合と、NP が対照的に用いられた時を除き $a + \begin{pmatrix} +N \\ +PRO \\ \alpha \end{pmatrix}$ 及び Ob-h の $\begin{pmatrix} +N \\ +PRO \end{pmatrix}$ を削除する規則は次の通りである。

(35) T_{PN-Del}

$$XY \begin{pmatrix} +N \\ +PRO \\ \alpha \end{pmatrix} Z \rightarrow 1, \emptyset, 3$$

$$\begin{array}{ccc} 1 & 2 & 3 \end{array}$$

ここに $Y = \emptyset$ 又は a

条件 i) $Y = a$ のとき $\alpha > [-deictic]$ 又は $[-contrastive]$

ii) $Y = \emptyset$ のとき $\alpha \triangleright [-deictic]$ 又は $[-contrastive]$

(32)に T_{PN-Del} が適用されれば *ve le* なる VP になる。他方、この規則の適用を受けず定冠詞が Nの前に付加されることがある。定冠詞変形は既に見た代名詞の場合と同様〔+definite〕をもつNの前に関連の素性を copy し定冠詞形の代入と NP 削除によって行なわれ、例えば (6e) に類似した *muestra le a el chico* の構造を作る。

〔*ve lo libro*〕_{VP} のような Ob-h の代名詞では(35)により 〔*ve lo*〕_{VP} に変形されるため定冠詞化は起らない。(32)においてNPが〔+contrastive〕を持つ時は T_{PN-Del}の適用を受けず、また定冠詞化が行なわれる代りに、この〔+N, +PRO〕が再び代名詞化変形を受けたと考えられるのが (30b)である。これは(31) T_{PRO} に若干修正を加え(35) T_{PN-Del} と共に代名詞語彙挿入以前に繰り返し適用できる反復規則とすることで説明可能である。(32)に再び(36)の規則が用いられると(37)になる。

(36) T_{PRO}

$$XY \begin{pmatrix} +N \\ +PRO \\ \alpha \end{pmatrix} Z \rightarrow 1, \begin{pmatrix} +PRO \\ \alpha \end{pmatrix} + 2, 3, 4$$

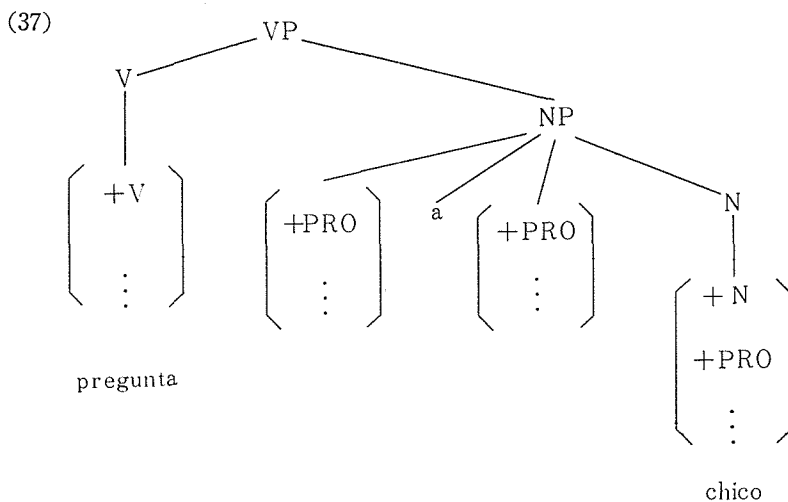
$$\begin{array}{ccc} 1 & 2 & 3 & 4 \end{array}$$

ここに $X > [+PRO] + a$ 又は $X \triangleright a$ $Y = \emptyset$ 又は a

$\alpha = (31)$ に同じ

条件: $Y = a$ の時, $X \triangleright [+V] [+PRO]$

(37)の構造は T_{PN-Del} の条件(ii)にあたり最右の〔+N, +PRO…〕は必ず削除され、従ってこれ以上の代名詞化は不可能である。ここでaの後の〔+PRO〕に交替すべき代名詞形は(33)に見当らない。(37)に適するのは〔- [+V] —〕をもつ *él* でなければならない。西語の非目的格代名詞は1・2人称単数に対しては〔± [+prep] —〕で区別される2種類が存在する。今、



1・2人称及び男女間の差を無視して単数の各代名詞項目は次のように表記されるとすれば(39)の解釈規則が必要となる。

(38)

	[3 pers]	[(+V) —]	[(+prep) —]
yo, tú	u	m	u
mí, ti	u	m	m
me, te	u	u	u
él, ella	m	m	u
le, lo, la	m	u	u

(39)

$$u \text{ } [+prep] \text{ } \text{---} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} - \text{ } [+prep] \text{ } \text{---} \\ + \text{ } [+prep] \text{ } \text{---} \end{array} \right\} / \left(\begin{array}{l} \text{---} \\ m \text{ } 3 \text{ pers} \\ m \text{ } [+V] \text{ } \text{---} \end{array} \right)$$

代名詞化が済むと目的格代名詞移動変形が $[\text{pregunta le}]_{vp}$, $[\text{pregunta lo}]_{vp}$, $[\text{pregunta le a él}]_{vp}$, $[\text{veo lo a Juan}]_{vp}$, $[\text{al chico vi le}]_{vp}$ などにおける le, lo を動詞前位置に移す。この変形は肯定命令文を除くすべての定動詞文に義務的に適用される。¹³

(40) … le pregunta.

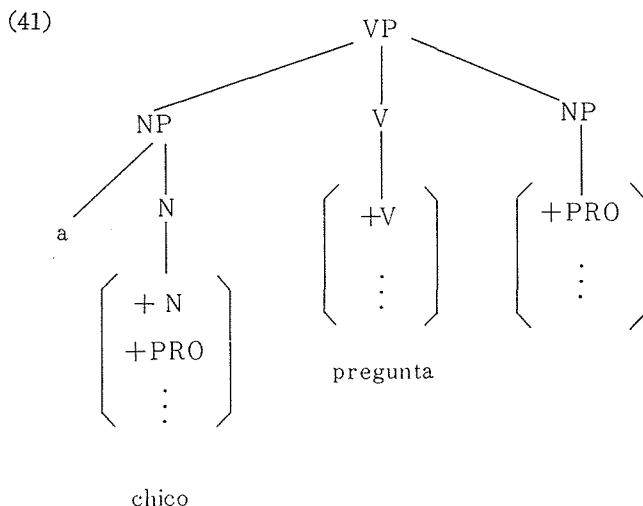
lo pregunta.

le pregunta a él.

lo veo a Juan.

(30 b)の variant としての(42)や(1'''), (5'''a)における a él le は(40)の le…a él が倒置されているというよりむしろ(7)のタイプのOb前置文と関連づけられるべきである。目的格前進変形 T_{Ob-M} は(36) T_{PRO} の後で名詞にも代名詞にも適用され a+NP が動詞に先行する。(7 a)の展

開で〔+PRO〕と変ったNP,あるいはT_{Ob-M}で動詞の左に移された元来のanaphoricな代名詞は第2回目のT_{PRO}及びT_{PN-Del}によってAl chico lo vi, A él lo ve Juanのloが導かれることになる。(32)はT_{Ob-M}を適用された直後の段階で(41)の構造に変わる。これに再度代名詞化が行なわれ最終的に(42)のa él leが生成される。



(42) Juan llama al chico y a su madre y a él le pregunta.

9) Ob+hの前に前置詞aを導入するための諸規則とObの代名詞化に係わる関連規則の順序関係をまとめてみると次の通りである。

- i) Sに直接支配されるNPとPredに直接支配されるNPが同一のとき後者を削除する変形
T_{np-d} (26)
- ii) Sに直接支配されるNPとPredに直接支配されるNPがあるとき causative segment
を付加する変形..... c. f. (28) (29)
- iii) 〔+human〕名詞の左に接する動詞〔+V, -adj〕に含まれる前置詞素性の指定変更を
行なう規則 Ta (24)
- iv) 前置詞 a をVの後に導入する規則 T_{pa} (21)
- v) 代名詞に関連する素性を copy する規則 T_{PRO} (36)
- vi) (a+)NPを削除する T_{PN-Del} (35)
- vii) 目的格前進変形..... c. f. (32)(41)
- viii) 定冠詞変形
- ix) 目的格代名詞移動変形.....c. f. (40)
- x) 代名詞語彙挿入 c. f. (33)(38)

〔注〕

1. Horst Isenberg (1968) は George Lakoff の説く irregularity の処理法に基き、この問題を集中的に扱っている。c. f. G. Lakoff (1970b).
2. 例えば Salvador Fernández (1951), § 106 : Causas del leísmo. p. 198; J. Coste & A. Redondo (1965), *Emploi des formes «LE» et «LES»* pp. 186—187; María Moliner (1966), I Complemento p. 696; Stevenson (1970), Ch. 17 Personal A pp. 101—106 などにおいて意識されているが示唆にとどまる。
3. 勿論、動詞によっては〔+animate, -human〕の名詞をも与格に許すケースがあり、また〔-animate, -human〕名詞の中にも間接的に人間に関する意味素性を含むものは与格に立ちうるが、この事は人称対格にもあてはまり、両者の関係の密接さを示す。
4. 正確を期すためには多くの留保をつけなければならない。a が起こるのは〔+human〕の前だけではない(上注3参照)し又、諸々の条件下で〔+human〕であってもaが排除される場合(例えば(2b))がある。実際、名詞に限らずある種の代名詞の〔+human〕の目的格はaを要求する。本稿の論旨に本質的な影響を与えることはないと考えるのでここではこれらの詳細を全く無視することにする。
5. Sandra S. Babcock (1970) は In non-causative sentences of the shape 'subject-verb-object', the inseparable affix occurs if the object is a named human noun. We cannot say
 - (a) *La conozco a esa chica.
 - (b) *La veo a esa chica.
 as a variant for
 - (c) Conozco a esa chica.
 - (d) Veo a esa chica.
 としている。また Conozco a María, Hablo a Juana と《deixis》文 La conozco a María, Le hablo a Juana の間に見られる意味の違いを動詞の aspect に関連づけた興味ある見解を示している。(p. 20—21)
6. (8) と同様な構文を許す動詞として aconsejar, advertir, avisar, pagar, perdonar, preguntar, inspirar, vestir, desnudar, robar etc. がある。
7. (8'a) は全く文法的でないと言い切れない面もある。なぜならば laista にとってこの文は完全に正常であるからである。
8. Bello (1958) によれば《Les lisonjea la popularidad de que gozan》の les は los と置き換えられないと認めるが《Lisonjeados por la popularidad, etc》の受動転換は完全に acceptable である。しかしこの転換は対格の una señal inequívoca でないと主張し (§ 739, p. 242), 受動文に転換されるとき与格が主語になり得るとしている。
9. 無差別に対格・与格のどちらをも目的語にとる動詞や両格の混同及び ser 受動文との関連については Bolinger (1950) が詳しい。
10. Rafael Seco (1966) は laísmo を重視して対格／与格に代って男性／女性の区別が統語的な働きを担う傾向を指摘するが、

De aquí se deduce que la tendencia natural del idioma es aprovechar diversas formas existentes, no para la distinción de casos (dativo/acusativo), sino para la distinción de géneros (masculino/femenino). ...Es decir, el hombre de la calle español no siente la diferente configuración sintáctica de estas dos oraciones: *la vi ayer por la tarde*; *la dije lo que quería*. Pero si le interesa destacar que es *la*, a ella, a una mujer, y no a un hombre, a quien vio o a quien dijo algo. (p. 158)

仮に laísmo を一般的な事実として認めるとしても、上記の事は3人称代名詞のみに言えることであって、明らかに名詞のa対格・与格との平行関係が見落されている。

11. 例えば法・時制・否定など文修飾句に係わる Modality は本論を通じてすべて省いている。NP の展開においても実際は NP→N(S) の繰り返し型が見られるが、考慮外に置いた。また(ii)はより完全な式にすれば繰り返し要素として右辺にSを含む。Pred→ $\left\{ \begin{matrix} \text{NP} & \text{VP} \\ & \text{S} \end{matrix} \right\}$ この規則は Juan le hizo matarlasなどの基底構造を説明するのに必要になるだろう。
12. ‘対格’と‘与格’ではaの前置を要求する条件は細かい点で確かに異なる。しかしだからといって対格・与格のaが異なる起源をもち、別々に導入されねばならないという理由にならない。そのような条件の違いは同一規則のSDで〔±caus〕及び埋め込み文でのObの有無に言及することにより表わし得る。
13. Ob 代名詞が動詞前の位置に生成されるのではなく、移動規則で動詞の前に移ると考えるべき根拠は肯定・否定命令文における語順の処理に関して見られる。c.f. Langacker (1968).

〔1971年8月〕

参 考 文 献

- Anderson, J. (1968): “Ergative and Nominative in English” in *Journal of Linguistics* 4, pp. 1—32
- (1971): *The Grammar of Case: Toward a localistic Theory*, Cambridge
- Babcock, S.S. (1970): *The Syntax of Spanish Reflexive Verbs*, The Hague
- Bello, A. (1958): *Gramática de la Lengua Castellana*, Quinta Edición, Buenos Aires
- Benot, E. (1952): *Arte de Hablar: Gramática Filosófica de la Lengua Castellana*, Nueva Edición, Buenos Aires
- Bolinger, D.L. (1950): “Retained Objects in Spanish”, in *Hispania XXXIII*, pp. 237—239
- Chomsky, N. (1965): *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge Mass.
- Contreras, H. (1970): Review of M. G. Goldin: *Spanish Case and Function*, in *Lingua* 25, pp. 17—29
- Coste, J. & Redondo, A. (1965): *Syntaxe de L’espagnol Moderne*, Paris
- Cressy, W. W. (1968): “Relative adverbs in Spanish: a transformational analysis” in *Linguage* 44, pp. 487—500
- Criado de Val, M. (1958): *Gramática Española*, Madrid

- Feldman, D. M. (1965) : "Pronoun Position and the Syntactic Verb-unit in Spanish" in *Studies in Linguistics* 18, pp. 13—28
- Fernández, S. (1951) : Gramática Española : Los Sonidos, el Nombre y el Pronombre, Madrid
- Fillmore, C. J. (1968) : "The case for case" in E. Back & R. Harms (eds), *Universals in Linguistic Theory*, New York
- Goldin, M. G. (1968) : Spanish Case and Function, Washington
- Halliday, M. A. K. (1963) : "Notes on Transitivity and theme in English, Part 3" in *Journal of Linguistics* 4, pp. 179—215
- Hills, E. C. (1920) : "The Accusative 'A' " in *Hispania* III, pp. 216—222
- Inoue, K. (1970) : " 'Case' from a New Point of View" in R. Jakobson & S. Kawamoto (eds) *Studies in General and Oriental Linguistics*, Tokyo pp. 246—280
- Isenberg, H. (1968) : "Das direkte Objekt im Spanischen" in *Studia Grammatica* IX, Berlin
- Lakoff, G. (1970a) : "Pronominalization, Negation, and the Analysis of Adverbs" in R. A. Jacobs & P. S. Rosenbaum(eds), *Readings in English Transformational Grammar*
- (1970b) : Irregularity in Syntax, New York
- Langacker, R. W. (1968) : Review of R. P. Stockwell, J. D. Bowen & J. W. Martin : *The Grammatical Structure of English and Spanish*, in *Foundations of Language* 4, pp. 211—218
- (1970) : Review of M. G. Goldin : *Spanish Case and Function*, in *Language* 46, pp. 167—185
- Langendoen, D. T. (1969) : The Study of Syntax, New York
- Lees, R. B. & Klima E. S. (1963) : "Rules for English Pronominalization" in *Language* 39, pp. 17—28
- Lenz, R. (1944) : La Oración y Sus Partes, Santiago de Chile
- Lyons, J. (1968) : Introduction to the Theoretical Linguistics, Cambridge
- Martínez Amador, E.M. (1966) : Diccionario Gramatical y de Dudas del Idioma, Barcelona
- Moliner, M. (1966) : Diccionario de Uso del Español, Madrid
- Molho, M. (1958) : "La question de l'objet en espagnol," in *Vox Romanica* 17, pp. 209—219
- Postal, P. M. (1966) : "On So-called Pronouns in English" in R. A. Jacobs & P. S. Rosenbaum (eds), *Readings in English Transformational Grammar*
- Pottier, B. (1969) : Grammaire de l'espagnol, Paris
- Ramsey, M. M. (1894) : A Textbook of Modern Spanish, New York
- Ross, J. R. (1967) : "On the Cyclic Nature of English Pronominalization" in *To Honor Roman Jakobson* III, pp. 1669—1682
- Seco, R. (1966) : Manual de Gramática Española, Madrid
- Stevenson, C. H. (1970) : The Spanish Language Today, London

Stockwell, R. P., Bowen, J. D., & Martin, J. W. (1965) : The Grammatical Structures of English and Spanish, Chicago

Velten, H. V. (1932) : "The Accusative Case and its Substitutes in Various Types of Languages" in *Language* 8, pp. 255—270